

ヴァルナよさらば

[テーマ③私の異文化交流体験記]

東京都 かえつ有明高等学校 3年

三輪 風駕

「臭い…」。たじろぐような異臭に思わずつぶやいた。気温は摂氏40度を超えていた。午後の焼け付くような日差しが降り注ぎ、汗が背中を滴り落ちた。建物の屋根はブルーシートで覆われ、まるで海辺のパラソルのようだ。ただしリゾートビーチにいる快適さとは無縁だが。ここは、デリーのスラム街、サンジャイだ。7月は暑さのピークは越えているのに立っているだけで目がくらんだ。私は高校の研修でインドを訪れていた。

研修は私の高校と友好関係にあるデリーの名門プライベートスクール Suncity School との交流が目的だ。同校は良家の子女が通うエリート校で生徒はクイーンズイングリッシュを流ちょうに話す。瀟洒な校舎で、自己紹介に始まりインドの伝統音楽やダンス、ヒンディー語のレッスンなど盛りだくさんの企画を楽しんだ。宿も生徒の家庭にホームステイさせていただく。同学年のコロニーさんと下級生のサンジェイ君の家庭にお世話になり、三世代が同居するお住まいで快適に過ごすことができた。

研修にはインド屈指の名門大学であるインド工科大学を見学する企画も含まれ、最先端テクノロジーの一端に触れることができた。また、日本とインドの合弁自動車会社マルチ・スズキの工場見学では、両国の太い経済のつながりを知ることができた。ハイライトは有名なeスポーツ企業の創業者夫妻のお話を伺う機会だ。グルーパー夫妻はインドでは、ソフトバンクの孫正義のような人気者で、同行したSuncity

Schoolの生徒たちも大興奮だった。

しかし、連日インドの輝かしい大躍進の様子を見て感動していた私は、頭から冷水を浴びせられた。それはデリーのスラム街を訪れ、そこに住む子どもと「交流」するイベントだった。当初はなぜこの企画が研修に組み込まれているか、いぶかしく思い、あまり興味は抱けなかった。というのは、小・中学生の頃にマレーシアやインドネシアを訪れた際に「汚い所」という印象しか残らなかったからだ。この思い出からスラム訪問当日の朝は「病気をうつされたら嫌だな」と思い気乗りしなかった。ところが、突然の豪雨でスラム訪問は「衛生上の理由」から延期となった。私は内心ほっとした。

翌日、天気が回復し改めてスラム街を訪問したが、その景色は私の想像を超えるものだった。スラムはゴミ処理場に隣接、というよりゴミ処理場の中にあつた。ゴミが山積みされ、ぬかるみだらけ。そこにある朽ちかけた廃屋が住民のすみかだ。だが、そのとき感じたショックは、幼いころ感じた「汚い」という気持ちではなかった。私は雨が降れば「衛生状態が悪化した」としてスラムに足を踏み入れることを中止できるが、その住民は雨が降っても逃げ場がないという現実には衝撃を受けたのだ。それまで見聞きしてきたインドの輝かしい面の一方で、その繁栄に取り残された多くの最貧民が目の前にいるのだ。天国と地獄を垣間見た気がした。

スラム街から戻ったのち、ホストファミリーやSuncity Schoolの生徒に、このような大きな格差がある原因は何かを尋ねた。彼らがためらいながらも一様に口にした言葉は「ヴァルナ」だった。ヴァルナについて調べた。カースト制とも呼ばれるヴァルナは元々はアーリア人がドラヴィダ人を差別するために用いた制度だったことは世界史の授業で習っていた。しかし新たに知ったこともあった。ヴァルナがインド

社会に定着するようになったのは、イギリスが統治のためにインド人を分断し、支配しやすくしようと利用したことが契機だったということだ。ということは、ヴァルナによる社会の分断・差別はインドの数千年の歴史に根差すのではなく、たかだか植民地支配時代の歴史しかないのだ！ 日本ではあまり意識してこなかった階級差別の問題を突き付けられ、「努力すれば必ず報われる。貧しいのは努力が足りないからだ」と考えていた浅慮を恥じた。それと同時に、階級差別の壁を打ち壊すダイナミズムもインド工科大学の学生の話から実感した。彼らはこう言っていた。「数学科を卒業しITビジネスに就くことがヴァルナを壊す突破口だ。なぜなら、歴史上存在しなかったITビジネスにはヴァルナの制約もないから」

インドについてもっと知り、この素晴らしい歴史と底力を持つ国と日本との架け橋になりたい。インドの明るい面だけではなく陰の部分を肌で感じ、この思いを強く抱いた。インドを深く研究したい、ヒンディー語も学びたい。この希望を実現できそうな大学を見つけ、インド研修から丸1年たった今年の夏、オープンキャンパスに参加した。会場で立ち働く学生はそろいのオレンジのTシャツを着ている。インドの国旗の色だ！ 期待に胸を膨らませキャンパスに続く坂道を上った。

